

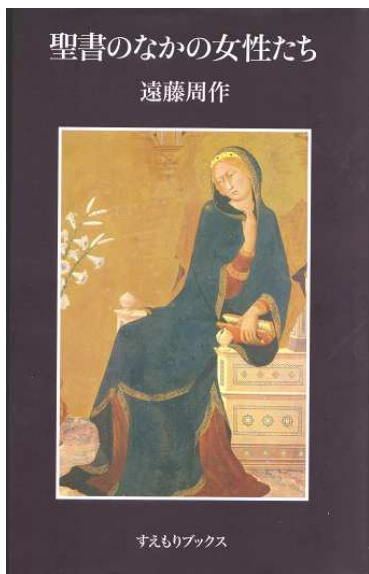
『聖書の中の女性たち』を読んで

先日、友人が遠藤周作著『聖書の中の女性たち』を送って下さいました。イスラエルの写真も載っていて、美しい装丁の本です。私が旧約聖書の女性たちについて、感想をホームページに書いていたので、参考にしてくださいという事でした。本当に感謝して読みました。

『聖書の中の女性たち』の最初のページから、文学の香りが立ち上り、魅了されました。例えば、「突然、黄昏の静かな光のなかで見なおす絵のように思いがけない影をともなって浮かび上が」るように、美しい文章で、様々な女性の話が書かれています。遠藤周作は新約聖書から、イエス・キリストに関係する女性たちを扱い、女性の姿を描きながら、ご自身のキリスト告白をしているのです。

- ☆ 涙でイエスの足をぬぐい香油を注ぐ女…人生の辛さに怯え、家族、友人からも見放され、罪人とさげすまれる人のためにやって来たというキリストの前に立ち、涙をながした。
- ☆ 長血を患う女…病気のためすべてを失い、生きているより死んだ方がいいと思うほど苦しんだけれども、指先ほどの願いをも感じ取ってくれたキリストに出会った。
- ☆ マグダラのマリア…罪と闇、夜と悪の世界にもがき、悶えていた自分が、キリストによって自分の情熱を込めて生きる道に初めて眼を開かされた。
- ☆ マルタ…自分の正義、正しさに立ち、自分には不可解なものを嫌い、軽蔑し、拒絶してしまう時に、優しく教えるキリストにふれた。

弱さと悲しみの極致に、キリストが目を注ぎ、苦しみを知って、共に生きてくださる。イエス様の姿を再現することにもなる、詩的、文学的表現でした。このほかにも多くの女性が登場しています。



遠藤周作にとって、最大の関心はイエスの母マリアです。マリアは一人の平凡な庶民の娘であったのに、運命を受容し、人間的苦悩を負った女性。けれども、その受容した信仰のゆえにマリアを高貴な女性とし、「聖母」として捉えているのはカトリック信徒である所以でしょう。イブ(エバ)と対比させています。

イブは始めから運命的な女性ではなかった。むしろ、彼女は悩みも苦しみもない祝福された世界にいたのである。この祝福された世界に彼女は「反抗し」そして自らのまわりに暗い宿命をつくっていった。ところがその逆にマリアは決して与えられた運命に「反抗しよう」としなかった。むしろその運命を一人の女として背負うことによって、人間的なものから、人間をこえたものに高まっていっているのです。この点でもイブとマリアとは聖書の中では極端に対照的な二女性であるわけです。(113頁)

遠藤周作は、主イエスが弟子ヨハネに「見なさい。あなたの母です。」(ヨハネ19:27)と言った言葉から、マリアをすべての人の母として捉え、さらに「聖母」とタイトルを与えています。この点が私とは全く違う理解です。マリアが普通は受け入れられないような運命を信仰によって受容したことによって、キリストの誕生があったという事実は大きいことです。けれども「聖霊によって身ごもった」(マタイ1:18)とは信仰の表現であり、血筋、血統という人間の肉体的価値で判断するのではなく、人間の常識とは全く断絶した存在、「キリストは神が生んだ、神のひとり子である」と告げていると思うのです。ですから、マリアを「聖」という範疇に置いて特別視することはできません。一人の人間、一人の女性として、私は尊敬するばかりです。エバの方こそ、すべての人間の母であると、聖書は告げています。

アダムは女をエバ(命)と名付けた。彼女がすべて命あるものの母となったからである。(創3:20)

遠藤周作がエルサレムを訪問されたのは1960年以前で、エルサレム旧市街がヨルダン領のところで、大変だったでしょうが、深い感動をもって現地を見ておられる様子に心打たれました。